

# 一人ひとりの人生がコンテンツ

## ～みらくるTV(中)

新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言下に開局した「みらくるTV」は、オンライン双方向会議システムZoomを活用した市民放送局だ。開局2カ月目を迎えた6月上旬には、北九州市のイベントと連携した特別番組を実施しノウハウと自信を深めた。今回は「みらくるTV」初の地域連携イベントとなった特別番組と、多彩なレギュラー番組を担う人々を紹介したい。



レギュラー番組「朝の体操」を放送中の原香織さんと長女の未来美さん(2020年5月8日放送)

### 特別番組で地域を応援

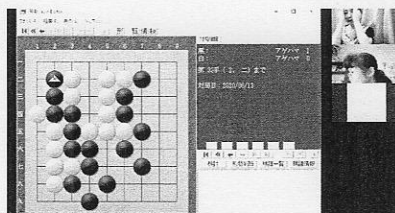
北九州市では今年6月、我が国囲碁界三大タイトルの一つ“本因坊戦”が開催される予定だったが、新型コロナウイルスの影響で無観客対局へと変更せざるを得なくなっていた。それでも日本を代表するプロ棋士が北九州で対決することに、地元は大きな期待を寄せていた。

「みらくるTV」では、木谷正道代表(72)が、昭和の名棋士・故木谷實九段の三男でもあることや、昨年、大船渡で開催された本因坊戦の実行委員長を務めたことなどから、現地の相談を受け、本因坊戦に絡めてオンライン上で「北九州市民ZOOM囲碁まつり」を開催するイベント番組を行うことになっていた。しかし、折しも5月末から6月初旬にかけての同市域での感染拡大により、地元が楽しみにしていた無観客試合までもが東京で開催されることとなり、関係者や囲碁ファンは灯が消えたような落胆ぶりだったという。こうした状況の中、番組を行うか中止すべきか、現地からの相談を受けた木谷代表が「やっぱりやろう!」と答えると地元関係者は皆喜んだという。

「みらくるTV」では、急遽イベント名を「北九州がんばれ!ZOOM囲碁まつり」と変更し、6月12日から3日間に渡って「北九州市民ZOOM囲碁まつり開会式」「囲碁教室」「北九州市の観光情報～歴史・景勝・名産品」「全国囲碁センターからの中継」など北九州市を応援する多彩な特別番組を発信した。中でも日本や韓国の視覚障がい者が参加した「世界盲学校・視覚障がい者囲碁大会、ZOOM最強戦」は、点字新聞の全国紙などでも紹介され大きな関心と反響を呼んだ。

「準備期間は短く大変だったが、開催したことで地元の関係者の皆さんが元気になり喜んでいただけた。首都圏のスタッフと現地の関係者が一つに繋がれたことは大きな成果、「みらくるTV」の新たなステージが見えてきた」と木谷代表は振り返る。

「みらくるTV」では今後、9月の「首都防災ウィーク」(東京)、10月の「21世



特別番組「北九州市民ZOOM囲碁まつり」～盲学校・視覚障がい者会場第2局(2020年6月13日放送)

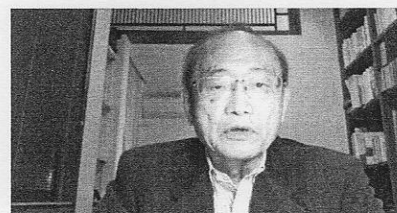
紀の朝鮮通信使」(福山)、11月の大船渡での復興音楽イベントなど、様々な地域イベントとの連携を企画中だという。

### 一人ひとりの人生が番組

「みらくるTV」のレギュラー番組には、防災、障がい福祉関連の研究者や実践者、著名人など多彩な顔ぶれが並ぶ。何人かにお話を伺った。

#### ○浅野史郎氏(元宮城県知事、神奈川大学特別招聘教授)

「障がい福祉は自身のライフワーク」と語る浅野史郎氏(72)は、木谷代表とは大学の同期。「今、障がい福祉を考える」という番組を第1・3日曜日に担当している。番組では、浅野さんがこれまでの福祉人生で出会った障がい者や支援団体関係者が毎回ゲストで出演、当事者体験を語る。時には重い障がいを抱えたゲストが指文字でコミュニケーションしながら参加することもある。



浅野史郎氏レギュラー番組「今、障がい福祉を考える」(2020年4月26日放送)



「みらくるTV」の良さは、障がい福祉に関心のある人だけでなく多様な興味を持つ人々が参加し視聴していること、障がいの当事者が自分の場所で無理なく参加でき、視聴者の反応や意見がダイレクトに返ってくることで得るものが多いこと、と語る。当初は伝えるための「義務ベース」で始めたという浅野さん、続けているうちに、楽しさと意義が毎回深まり、今では「みらくるTVに出るのは私の権利だ」と「権利ベース」へと意識が変わってきているという。

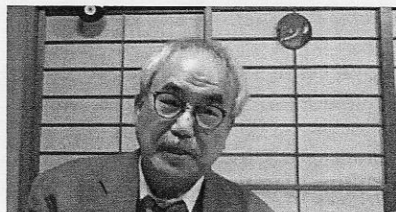
○中林一樹氏(東京都立大学名誉教授、都市防災学・災害復興学)

25年前都庁職員として防災問題に携わっていた木谷氏に防災・災害復興の専門家として出会い、その後ともに「東京いのちのポータルサイト」を立ち上げるようになった中林一樹氏(72)。昨年12月にNHKで放送された、架空の東京での首都直下地震後の4日間を描いたドラマ付ディスカッション番組「パラレル東京」の制作に、スペシャリストとして深く関わりゲスト出演している。

日常と被災をパラレルではなくシームレスにつなげて考え議論する重要性、コロナの中で自然災害が起きる複合災害への準備の必要性などの問題意識から、相互ディスカッション番組「首都直下地震～一人ひとりの準備を急げ」を第2・4日曜日に担当。「顔が見える関係が作れる「みらくるTV」は、一方通行のマスコミュニケーションではなくスモールコミュニケーション。誰でも入れて放送とは違い皆で議論するTV、フェイスtoフェイスで、市民の真剣な対話ができる」と既存メディアとの違いを語る。

○柿島光晴氏(日本視覚障害者囲碁協会代表理事)

全盲のアマチュア棋士・柿島光晴氏(42)は、10年前に福祉の囲碁のイベ



中林一樹氏レギュラー番組「首都直下地震～一人ひとりの準備を急げ」(2020年4月19日放送)

トで木谷氏と出会い意気投合し活動を共にしてきた。アマチュア四段の囲碁段位を持ち視覚障害者への指導も行う柿島さんは、番組「視覚障がい者への囲碁入門」を受け持つ。

視覚障がい者用基盤「アイゴ」とPC音声ソフトを用いて、音と画面の双方で伝えるその番組スタイルは、見えない人と見える人が同じ土壌で対戦し楽しめる方法としても画期的だ。毎回視聴者が増えてきているという。「視覚障がい者の囲碁の器具も番組も、もっともっと良いものを作って行きたい。そのためにも、より多くの人に参加してもらえたら」と話す。

○古謝由美氏(日本高次脳機能障害者の会理事長)

高次脳機能障害(\*)というまだ社会にあまり知られていない障がいについて、理解を広めるための番組「高次脳機能障害とは?」を毎月放送する古謝由美氏。同障がいを持つ次男とともに出演している。高次脳機能障害というものがあることがなかった時期に、どこにも相談窓口がなく一人で悩み、「福祉っていったい何だろう」と疑問を持ったことが活動の原点になっているという。「みらくるTV」の魅力は、様々な障がいを抱えて生きる方々との出会



全盲のヴァイオリニスト白井崇陽氏の番組「僕らのパーソナルヒストリー」(2020年5月12日放送)

い、多様な意見を聞けることにあるという。多くの人に参加してほしいと語る。

○原香織氏(「みらくるTV」番組編成部長、シティコン研究会、介護職)

高校時代100m走12秒60の記録を持つ元アスリートの原香織氏は、自らの体験を活かした「朝の体操」「口腔体操」などの番組を自身の子どもたちと毎日担当。防災から福祉、囲碁、音楽まで「ここには全てが詰まっています魅力的」という。「みらくるTV」の名称は原さんの発案。“みらい”が“来る”と“みらい”を“クルっ”と包み込む、多様なジャンルも包み込む、の意味をかけ合わせ、障がいを持つ長女・未来美さんの名前にも因んでいる。

この他、プロ棋士による囲碁指導、全盲のミュージシャンらの音楽番組、俳句など内容は多岐に渡る。直接の視聴者は今のところ最大でも100人弱だが、録画がYouTubeにアーカイブされ、世界中から視聴することができる。「メディアの効果は、どれだけ深い共感を得られるかです」と木谷代表はいう。各番組は、それぞれが歩んできた人生そのものがコンテンツになっているとも言え、そこには作り物ではない共感がある。それが「みらくるTV」の魅力と可能性なのだ。

PROFILE 兼古勝史 KANEKO KATSUSHI

放送大学客員教員、立教大学・明治学院大学 他 非常勤講師  
1962年札幌生まれ。高校音楽教師、サウンドスケープ研究機構研究員を経て、BSラジオ放送局St.GIGAディレクター、その後、CS放送、ケーブルテレビ業界、インターネット・市民ニュースサイトなどに携わり、現在は上記他メディア系大学学部において講義・実習科目等を担当。



(\*)高次脳機能障害)病気や事故等による脳の損傷が原因で起こる記憶障害、注意障害、遂行機能障害、失語症、失行症などの症状。見た目では障害が分かりにくく周囲に理解されにくい。